

TaKaRa

Strong Core, **Steady** Growth

アニュアルレポート 2009



自然との調和を大切に、
発酵やバイオの技術を通じて
人間の健康的な暮らしと
生き生きとした社会づくりに貢献します。



わたしたちTaKaRaグループは、日本伝統の酒造りの発酵技術と最先端のバイオ技術の革新を通じて、食生活や生活文化、ライフサイエンスにおける新たな可能性を探求し、新たな価値を創出し続けることによって、社会に貢献しています。

持株会社である宝ホールディングスは、酒類事業や調味料事業を展開する宝酒造グループ、バイオ事業を展開するタカラバイオグループに加え、健康食品事業の成長を加速させる役割を担う宝ヘルスケアを傘下におさめ、グループ全社の経営を調整・統括し最大限の事業成果を追求しています。

現在、TaKaRaグループは2000年に策定した10年間にわたる長期経営構想「TaKaRa Evolution-100(「TE-100」)」のもと、「業績の進化」「事業の進化」「経営の進化」「風土・人財の進化」「社会・環境行動の進化」という5つの進化の実践に取り組んでいます。酒類・調味料事業を安定した収益基盤と位置付け、バイオ事業と健康食品事業によりさらなる成長の可能性を広げ、真の企業価値(value)の向上に努めていきます。

Contents

プロフィール	01
営業概況	02
特集 Strong Core, Steady Growth	04
社長インタビュー	08
事業概要	13
コーポレート・ガバナンス	18
役員	20
社会・環境活動	21
6年間の主要連結財務データ	22
ファクトシート	23
主要子会社データ	24
会社概要	25
宝ホールディングスの歴史	26

将来見通しに関する注意事項

この報告書に記載されている、当社および当社グループの現在の計画、見通し、戦略、確信等のうち、歴史的事実でないものは、将来の業績に関する見通しであり、これらは現時点において入手可能な情報から得られた当社経営陣の判断に基づくものですが、重大なリスクや不確実性を含んでいる情報から得られた多くの仮定および考えに基づきなされたものであります。実際の業績は、様々な要素によりこれら予測とは大きく異なる結果となり得ることをご承知おきください。

実際の業績に影響を与える要素には、経済情勢、特に消費動向、為替レートの変動、法律・行政制度の変化、競合会社の価格・製品戦略による圧力、当社の既存製品および新製品の販売力の低下、生産中断、当社の知的所有権に対する侵害、急速な技術革新、重大な訴訟における不利な判決等がありますが、業績に影響を与える要素はこれらに限定されるものではありません。

営業概況

当期の売上高は、前期比100.5%の192,790百万円、営業利益は、前期比104.1%の8,851百万円となりました。当社の事業は、酒類・調味料、バイオ、物流、その他の4つのセグメントから構成されています。このうち、酒類・調味料セグメントが売上高の82.7%を占めており、TaKaRaグループの事業基盤を支えています。バイオ、物流、その他各セグメントは、すべての売上高を合計しても構成比17.3%ですが、バイオ事業や健康食品事業など、将来のTaKaRaグループの飛躍につながる成長性を持っており、重要な役割を担っています。

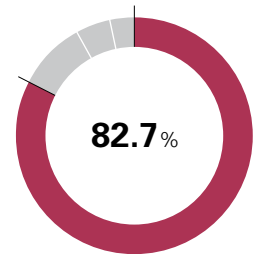
主要製品

売上構成比

■ 酒類・調味料



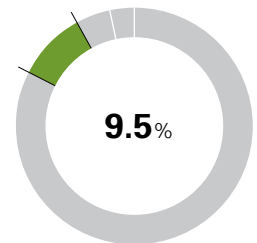
- 焼酎
- 清酒
- ソフトアルコール飲料
- 本みりん
- 食品調味料
- 原料用アルコール など



■ バイオ



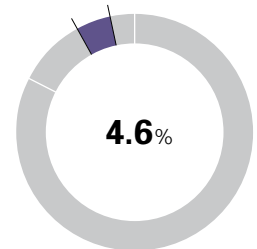
- 研究用試薬
- 理化学機器
- 研究受託サービス
- 遺伝子導入関連製品
- キノコ
- 健康志向食品 など



■ 物流



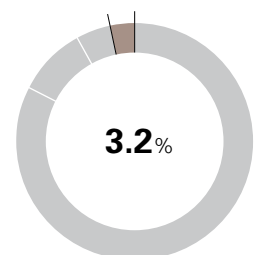
- 貨物運送業
- 倉庫業
- 流通加工業



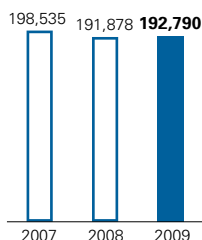
■ その他



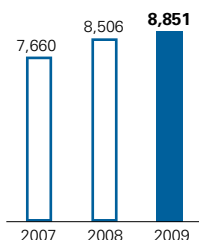
- ラベル
- ポスター
- 段ボールケース
- 販促用品
- 不動産賃貸
- 健康食品 など



売上高 (百万円)



営業利益 (百万円)

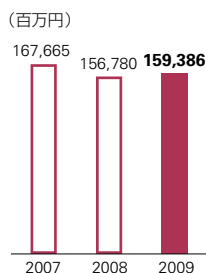


2009年3月期

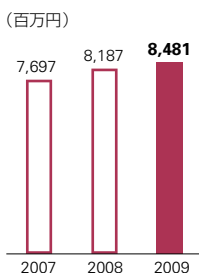
売上高 **192,790** 百万円 (前期比 100.5%)

営業利益 **8,851** 百万円 (前期比 104.1%)

売上高



営業利益

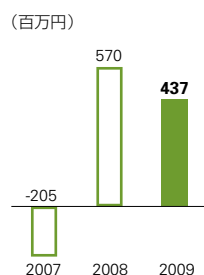
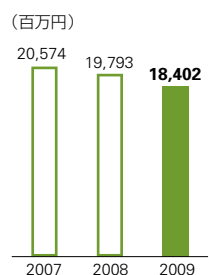


概況

当期の当セグメントの売上高は、前期比101.7%の159,386百万円、売上構成比は82.7%となりました。

高品質ブランドとして引き続き好調の「一刻者」^{いっこもん}が順調に売上を伸ばしたほか、前期に納入価格の改定を実施したために一時的に減少していた甲類焼酎大型容器商品の売上が回復しました。また、ドライ系チューハイの「焼酎ハイボール」や、果汁系チューハイの「直搾り」も売上を伸ばしました。

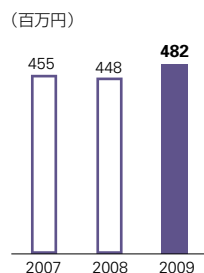
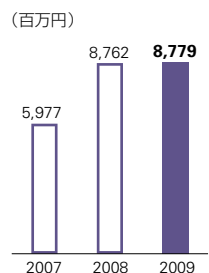
利益面では、原材料価格の高騰や、昨秋以降の経済減速の影響がありましたが、コストダウンや利益マネジメントの徹底を行うことで、営業利益は前期比103.6%の8,481百万円と増益を達成しました。



当期の当セグメントの売上高は、前期比93.0%の18,402百万円、売上構成比は9.5%となりました。

医食品バイオ分野においてキノコ関連製品の売上高が増加しましたが、主力製品である研究用試薬の売上高が円高の影響で減少したほか、質量分析機器などの大型機器の受注減、遺伝子医療関連特許実施許諾対価料や臨床研究の受託サービスの売上減少などにより、減収となりました。

利益面では、クロンテック社製品の中国への製造移管効果などによって原価率が改善しましたが、円高の影響による売上高の減少が大きく、売上総利益が減少し、営業利益は前期比76.7%の437百万円となりました。

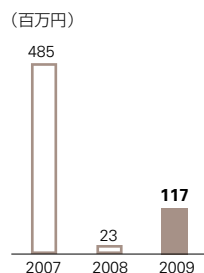
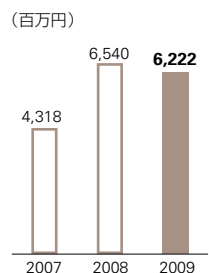


当期の当セグメントの売上高は、前期比100.2%の8,779百万円、売上構成比は4.6%となりました。

期前半の原油高騰に伴う軽油価格上昇の影響や、同業他社との価格競争激化などの影響を受けましたが、宝酒造の物流総代理店として業務の効率化努力を進めるとともに外部販売の拡大に注力したことにより、増収となりました。

利益面では、期前半の燃油価格高騰の影響を受け、原価率が悪化しましたが、経費削減努力によって販売費及び一般管理費を抑制し、営業利益は前期比107.6%の482百万円となりました。

※当セグメントは宝酒造グループの子会社が行う事業であり、2007年3月期までは酒類・食品(現:酒類・調味料)セグメントに含めておりましたが、金銭的重要性が増したため、2008年3月期より独立セグメントといたしました。



当期の当セグメントの売上高は、前期比95.1%の6,222百万円、売上構成比は3.2%となりました。

健康食品事業、印刷事業および不動産賃貸事業を中心に展開する中、健康食品事業でフコイダンを中心に通販ルートの顧客数が大幅に増加しましたが、バルク・OEMにおいて売上高が大幅に減少したため、減収となりました。

利益面では、健康食品事業の営業損失が減少し、営業利益は前期比496.0%の117百万円となりました。

Strong Core

強固に安定した基盤事業

宝酒造



本格麦焼酎「知しんけん」

TaKaRaグループの収益基盤である宝酒造は、持続的な成長を実現するため、差別化されたブランドの開発・育成を続けています。

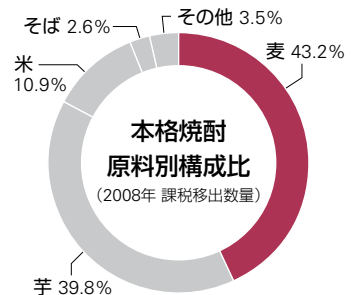
本格焼酎における、さらなる高みを目指して

全量芋焼酎「一刻者」の上市から3年。本格焼酎市場における「一刻者」の躍進とともに、次なる本格焼酎の開発に向けた挑戦が始まっていました。2008年8月に業務用ルート限定で新発売された、本格麦焼酎「知しんけん」です。

麦焼酎は、本格焼酎市場において40%以上のシェアを占める、最も大きなカテゴリー。いわば本格焼酎の主戦場とも言える存在です。成長著しい芋焼酎カテゴリーにおける「一刻者」成功の自信と、開発を通じて培われた造りへのこだわりが、次なる本格焼酎カテゴリーの攻略に向けた挑戦を後押ししました。



「一刻者」



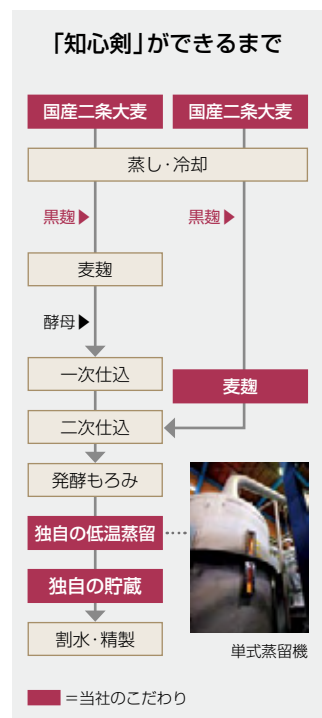
真摯なこだわりが生んだ、麦本来の香りと味わい

「一刻者」は、芋と芋麴だけで造る「芋100%」であることにこだわって開発されました。そして、良質な芋麴造りにこだわった結果、芋本来の甘い香りとうっきりとした上品な味わいを実現しました。この焼酎造りに対するこだわりは、「知しんけん」においても継続され、麦本来の香りと味わいを目指して4年2ヶ月もの開発期間が費やされました。

原料には安全・安心の国産二条大麦を100%使用。仕込には、黒麴を用いた全量麦麴仕込を採用しています。全量麦麴仕込は、一般的な製法に比べて時間がかかるうえ、同じ原材料の量から取得できるアルコール量も少ない贅沢な仕込です。しかしながら、麦の深い味わいを引き出すため、手間暇かけることをためらいませんでした。また、黒麴を使用することで、さらに甘みのある深い味わいに厚みを持たせました。

こだわりは、原料や仕込にとどまりません。焼酎の品質にとって、蒸留の仕方や貯蔵の方法は、もろみの出来栄にも劣らない重要な要素です。一般的な蒸留方法には、軽やかですっきりとした味わいに仕上がる減圧蒸留と、原料の風味が豊かになるものの焦げ臭がついてしまう常圧蒸留の2種類の方法がありますが、「知しんけん」造りに採用された蒸留方法は、一般的な常圧蒸留よりも低い温度で蒸留する独自の低温蒸留法。麦本来の味わいを活かしつつ、焦げ臭や麦のいがらっぽさを抑えるために、蒸留方法にこだわりました。また、独自の貯蔵法により蒸留後の焼酎に眠る麦本来の香りを最大限に引き出しました。

「しらしんけん」とは、大分の方言で「一生懸命」のこと。その名はまさに、酒造りに対する姿勢を体現しているのです。





しらかべくら きもと 松竹梅「白壁蔵」〈生酏純米〉

創業以来続く丹精こめた酒造りは、
日々進歩する「あるべき姿」に向け、
妥協なき挑戦を続けています。

蔵づくりから始めた酒造り

1975年以来縮小傾向にあり、高級酒と経済酒への二極分化が進む清酒市場。この状況を打開すべく、1998年から新たな蔵づくりが始められました。

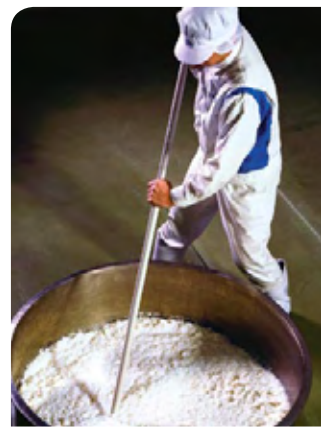
それは、1954年から酒造りを行ってきた神戸市東灘区の灘工場を、高品質な清酒のみを造る蔵へと生まれ変わらせる構想で、時代を超えて愛され続ける「本当に旨くてよい酒」を求めて、蔵づくりから取り組むという業界でも過去類を見ない規模のもの。蔵人が長年培ってきた「伝統的な手造りの技」を採り入れた酒造りを行う、という観点から設備の選定や開発が行われ、2001年に「白壁蔵」として生まれ変わって以来、最高品質かつ個性豊かな商品を次々と生み出しています。

蔵づくりの開始から10年が経った2008年9月、松竹梅「白壁蔵」〈生酏純米〉が上市されました。〈生酏純米〉は、酵母の増殖に適した環境を、微生物の働きを巧みに利用してつくりだすという、江戸時代から続く伝統技法「生酏造り」で仕込まれた清酒です。生酏造りで仕込まれた清酒は、清酒造りに必要な乳酸を自然につくりだすことで芯のしっかりとした、まるやかでやわらかい味わいになります。

飲んだ瞬間にその酒を造った人たちの顔、その酒が生まれた蔵の姿を想いめぐらすことのできるような酒を造ること。この目標に向かい、慎重に、誠実に、その手を動かして松竹梅「白壁蔵」〈生酏純米〉は造られています。白壁蔵では、飲みごたえがあって、飲み飽きのしない、飲み続けることのできる酒を、飲み手の顔を想いめぐらしながら、連綿と造り続けてまいります。



造り酒屋のイメージを残した「白壁蔵」の外観



生酏造り（酏摺り）の様子

信頼される商品をつくり続けるために

お客様の「いきいき」にとって必要な企業であり続けたい。当社グループは安全・安心な商品を送り届け、お客様の「いきいき」とした生活に貢献することが、最大の社会的責任であると考えています。この考えは、行動規準『消費者のいきいきは、私のいきいき』として明文化され、社員一人ひとりがこの姿勢を基本に、消費者の皆様の視点を第一に考えた商品をご提供していくことを目指しています。

安全・安心な商品をお届けするためには、体制づくりがなによりも大切なこと。宝酒造では、2000年に全工場ISO9002（現：ISO9001）の認証取得を完了しました。原料受入から出荷にいた

るまで、品質検査に合格したもののだけが後工程に進み出荷されません。製品検査においては、自動検査装置による異物検査や、検査士による目視検査や官能検査のほか、最新の分析装置を利用した成分分析も実施して、商品の安全と品質の確保に努めています。

原料調達においては、信頼できる調達先を選定し、すべての原料について「品質保証書」を入手し安全性を確認するとともに、由来や産地などの詳細な情報をデータベースで管理しています。

今後も、品質管理の水準をさらにレベルを上げて、安全・安心な商品を提供してまいります。

Steady Growth

着実に進展を見せる成長事業

タカラバイオ



遺伝子治療・細胞医療の商業化に向けて
着実に歩み続けるタカラバイオ。
次なる成長分野、ヒトiPS細胞の領域においても、
前進を続けています。

実用化が視野に入った遺伝子医療

1967年に発酵工学の研究から開始され、1979年に国産初となる遺伝子工学研究用の制限酵素を発売したのを期に、遺伝子工学研究分野へ進出したバイオ事業。この決断は、発酵技術を基本にした医薬品開発から、遺伝子を中心としたバイオ事業へと舵を切ることを意味しました。1995年にはレトロネクチン法を開発し、遺伝子医療分野へ進出。その遺伝子医療も治験段階を迎え、実用化が視野に入りつつあります。

2008年10月、国立がんセンター中央病院において、再発白血病などを対象とした体外遺伝子治療の治験が国内で初めて開始されました。再発白血病などを対象とした体外遺伝子治療とは、ドナーから採取したリンパ球にHSV-TK遺伝子を体外で導入し、患者さんへのドナーリンパ球輸注療法に使用するというもの。これは国内初の快挙で、我が国における遺伝子治療や細胞医療の足場づくりにつながることを期待されています。

中核技術であるレトロネクチン®を用いたリンパ球の拡大培養法によるがん細胞免疫療法では、2009年4月、消化器がんおよび肺がんを対象に、京都府立医科大学で臨床研究が開始されました。今後、京都府立医科大学と共同で、レトロネクチン®を用いたがん細胞免疫療法に温熱療法などを組み合わせ、より治療効果の高いがん細胞免疫療法の臨床開発を進めていきます。

今後も引き続き、臨床試験を実施し、科学的な安全性と有効性が担保された質の高い医療の確立に向け邁進してまいります。



細胞・遺伝子治療センター



レトロネクチン®

遺伝子医療分野におけるタカラバイオの中核技術

1995年に開発されたレトロネクチン法は、遺伝子治療における臨床研究の世界標準として、今日の遺伝子治療、および細胞医療の進歩に貢献しています。全世界の公的な医療機関での40を超える臨床研究で採用され、海外の民間企業4社へのライセンスアウトも行っています。

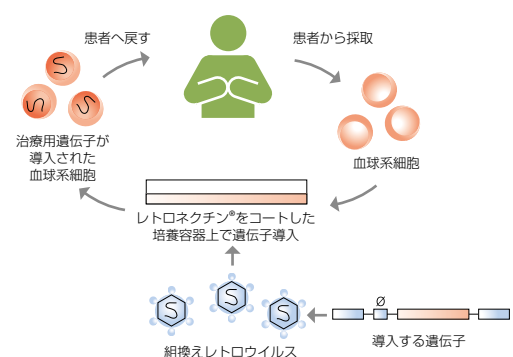
1. レトロネクチン法

レトロネクチン®とは、ヒトフィブロネクチンを改良した組換えタンパク質です。標的細胞とウイルスベクターの両者に対して特異的相互作用を持つことにより、レトロネクチン®上で、レトロウイルスと標的細胞が密接に接触し、遺伝子導入効率が上がると考えられています。レトロウイルスベクターを用いた高効率遺伝子導入法であるレトロネクチン法は、様々な医療機関や民間企業での遺伝子治療臨床研究で採用されており、体外遺伝子治療のスタンダードになりつつあります。

2. レトロネクチン®を用いたリンパ球の拡大培養法

リンパ球の拡大培養は、遺伝子治療や細胞医療に用いられており、レトロネクチン®拡大培養法とは、ヒトリンパ球の拡大培養の際に、インターロイキン2および抗CD3モノクローナル抗体に加え、レトロネクチン®を併用するものです。この結果、生体内での生存能力が高く、抗原認識能も高いナイーブT細胞を多く含む細胞集団が得られます。

レトロネクチン®を用いる遺伝子治療プロトコル





レトロネクチン法が加速する再生医療の進歩

レトロネクチン法は、再生医療領域においても活用の道が開かれつつあります。細胞に高い効率で遺伝子を導入する技術であるレトロネクチン法を用いることで、従来に比べて10～30倍の効率でヒトiPS細胞を作製できることが発見されました。従来法では、iPS細胞の誘導効率は非常に低く、研究を行う上での障害となっていました。

この成果を製品に結びつけ、2009年3月、ヒトiPS細胞作製用試薬を発売。また、同時に本試薬を使用したレトロウイルスベクター作製の受託サービスも開始しています。タカラバイオでは、iPS細胞作製に有用な製品・技術を多数保有しており、今後もiPS細胞関連の研究をサポートしてまいります。

タカラバイオグループが実施している臨床開発プロジェクト

遺伝子治療	対象疾患	地域	提携先
HSV-TK 遺伝子治療 (ドナーリンパ球輸注療法) ※治験	再発白血病	日本	国立がんセンター中央病院
HSV-TK 遺伝子治療 (ハプロadd-back)	高リスク造血器 悪性腫瘍	日本	国立がんセンター中央病院
TCR 遺伝子治療	食道がん	日本	三重大学医学部
MazF 遺伝子治療	エイズ	日本	医薬基盤研究所 霊長類医科学研究センター

細胞医療	対象疾患	地域	提携先
がん免疫再建療法	多発性骨髄腫、 頭頸部がん、 食道がん、卵巣がん	日本	三重大学医学部
がん細胞免疫療法	消化器がん、 肺がん	日本	京都府立医科大学
がん細胞免疫療法	腎がん	中国	中国医学科学院がん病院
がん細胞免疫療法	難治性がん	中国	天津医科大学 天津市腫瘍病院
がん細胞免疫療法	肝細胞がん	中国	中山大学がんセンター

宝ヘルスケア

宝ヘルスケアではタカラバイオの技術を利用した健康志向食品の製品開発や販売を強化し、健康食品事業を将来の成長事業へと導きます。

タカラバイオが開発を進めてきた、昆布「フコイダン」、寒天「オリゴ糖」、明日葉「カルコン」、キノコ「テルペン」、ボタンボウフウ、トゲドコロなどのTaKaRaグループの持つ様々な独自素材を、安心かつ安全な健康志向食品として市場に届けることで、お客様の健康で生き生きとした生活を応援します。まだ事業規模は小さいものの、通信販売を最も重要な販路として注力し、より幅広い顧客との接点拡大に努めて、収益の拡大を目指しています。



ガゴメ昆布のヌメリ成分「フコイダン」



宝ホールディングス株式会社 代表取締役社長
大宮 久

Q1. グループを取り巻く事業環境に対する認識、および、2009年3月期(以下、当期)の業績についてお聞かせください。

“ 厳しい市場環境の中、増収を確保するとともに、3期連続の増益を達成することができました ”

当期のTaKaRaグループ(以下、当社グループ)の連結業績は、売上高が1,927億90百万円(前期比0.5%増)となりました。売上総利益は、期前半の原材料価格高騰により減少しましたが、利益マネジメントを徹底し、販売費及び一般管理費を削減したことにより、営業利益は88億51百万円(前期比4.1%増)と、3期連続の増益を達成することができました。経常利益は、前期に一時的な要因によって増加した持分法投資利益の減少や、急激な円高による為替差損の発生により、87億1百万円(前期比4.6%減)となりました。当期純利益は、株価下落による投資有価証券評価損による特別損失が発生しましたが、過去に減損処理した固定資産の売却による繰延税金資産の計上に伴い法人税が減少したことにより、56億39百万円(前期比21.1%増)と、2期連続の増益を達成することができました。

当期の、当社グループの主たる事業である酒類・調味料事業においては、前期に納入価格を見直した甲類焼酎大型容器商品の売上回復や、全量芋焼酎「一刻者」の伸長などにより増収となりましたが、期後半より顕著となった景気後退により、^{いっこもん} 外食需要の冷え込み、低価格商品への需要のシフトといった逆風が強まりました。加えて、当期は「食の安全」を揺るがす事件が相次ぎ、お客様の食に対する安全・安心志向がさらに高まりを見せた一年でした。

一方、当社の次なる飛躍を担うバイオ事業については、当期は為替変動による円換算ベースでの売上の減少や、米国景気後退による研究用試薬の需要減などにより減収となりましたが、足元ではバイオテクノロジー研究開発に対する支援市場が順調に拡大しており、遺伝子医療においても、臨床応用案件が拡大し、再生医療実用化への展望が着実に開けつつあるなど、バイオ関連市場はさらなる広がりを見せています。

TaKaRaグループ 第7次中期経営計画

基本方針

成長投資と株主還元を通じ、中核事業の持続的安定成長と、成長事業育成の加速を実現し、企業価値の向上を目指す

3年間の各事業の位置付け

■ 酒類・調味料事業

持続的に安定した利益を創出し、確固たるキャッシュフローを下支えする。同時に、成長分野に関しては、成長事業への道筋を明らかにし、将来キャッシュフローを明確にしていく。

■ バイオ事業

遺伝子医療の商業化の加速と、それを支える収益基盤の強化を行い、将来キャッシュフローの拡大を図る。

■ 健康食品事業

将来、TaKaRaグループの収益の柱となるような成長事業として確立できるよう、事業基盤の構築に注力する。

財務戦略

既存事業における通常の投資に加え、成長のための投資に資金を投下し、そして積極的な株主還元を実施する。

成長のための投資

3カ年累計

100億円以上

株主還元総額

3カ年累計

100億円以上の実施
(これまでの2倍規模)

株主還元性向

下限値

50%の設定^{※1}

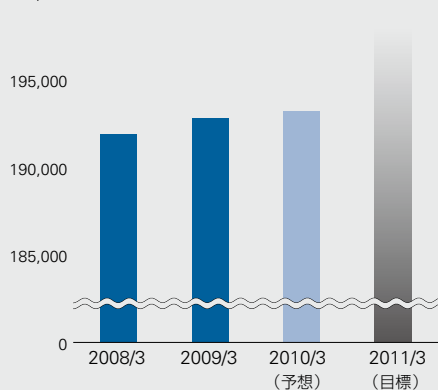
(※1) 以下の式で算出します。

$$\text{株主還元性向} = \frac{\text{株主還元総額 (配当総額 + 自己株式取得額)}}{\text{みなし連結当期純利益}^{※2}} \geq 50\%$$

(※2) みなし連結当期純利益 = (連結経常利益 - 受取利息・配当金 + 支払利息) × (1 - 法定実効税率)

定量目標 (TaKaRaグループ)

(百万円)



TaKaRaグループ連結で、2011年3月期売上高2,000億円以上、経常利益100億円以上を目指します。また、利益をあげ自己資本をコントロールすることで、自己資本利益率の改善に努めます。

■ 宝酒造グループ

2011年3月期売上高 **1,750億円**以上 経常利益 **80億円**以上

■ タカラバイオグループ

2011年3月期売上高 **190億円** 経常利益 **8億円**^{※3}

■ 宝ヘルスケア

タカラバイオの技術を活かした商品における通信販売顧客の獲得を最優先の戦略として活動する。

(※3) タカラバイオグループでは、事業環境を鑑み毎年3カ年の事業計画を更新しています。2009年5月に発表した最新の中期経営計画では、最終年度(2012年3月期)の定量目標として売上高200億円、経常利益10億円を掲げています。

Q2. 第7次中期経営計画(以下、第7次中計)の初年度が終了しました。進捗状況に対する評価をお聞かせください。

“各事業の戦略や業績については一定の成果を達成できたものの、第7次中計最終年度の財務目標を達成するための成長戦略には課題を残したと認識しています”



第7次中計では、各事業セグメントにおいて戦略目標を定めており、酒類・調味料事業では、「国内酒類事業の収益力の維持・向上」と「国内外の伸びる市場へのチャレンジ」を目指しています。

「国内酒類事業の収益力の維持・向上」に関して、当期は想定以上の原材料高騰がありましたが、コストダウンを行うとともに、利益マネジメントを徹底しながら売上を伸ばし、増収増益を達成したという点で一定の成果をあげることができたと認識しています。

商品面では、品質訴求商品の旗頭である全量芋焼酎「一刻者」のブランド育成が順調に進む中、本格焼酎市場の4割程度を占める麦焼酎分野へ、本格麦焼酎「知心剣」を業務用ルート限定で投入しました。「知心剣」は、開発に4年2ヶ月もの歳月を費やしたこだわりの本格麦焼酎で、「一刻者」に次ぐ柱となるよう、じっくりと育成を行う商品として位置付けています。また、年々消費量が目減りする国内清酒市場の巻き返しを図るべく、白壁蔵シリーズの旗艦商品として、松竹梅「白壁蔵」〈生酛純米〉を市場投入しました。

積極的な事業展開を行う一方で、お客様の当社商品へのご信頼をより強固なものとするべく、各工場において、質量分析装置などを用いた原料・製品の分析を強化するなど品質管理体制の一層の強化にも取り組みました。今後は、北京・カリフォルニアの工場においても国内と同水準の品質管理体制を敷く予定です。

一方、「国内外の伸びる市場へのチャレンジ」に関しては、不況の影響で十分な成長投資が行えず、海外事業と加工業務用調味料事業において十分な成長を果たすことができませんでした。

バイオ事業では、「遺伝子工学研究分野の事業拡大・安定化」「医食品バイオ分野の収益改善」「遺伝子医療分野における研究開発の推進」の三点を戦略目標として設定しています。

当期の成果として、遺伝子医療分野では、再発白血病を対象とした国内初の体外遺伝子治療の治験を国立がんセンター中央病院で開始しました。この動きは、商業化に向けた大きな前進を意味します。

また、遺伝子工学研究分野では、クロンテック社製品の製造を中国(大連)に移管した効果などによって粗利率を向上させ、医食品バイオ分野では、キノコ関連製品の売上を順調に拡大させるなど、安定的な事業基盤の構築においても一定の成果をあげることができたと認識しています。

将来の当社グループの収益の柱として期待する健康食品事業では、主力商品「フコイダン」関連商品が通信販売顧客増を牽引しましたが、成長スピードの面で課題を残しました。

このように、各事業とも一定の成果をあげたものの、第7次中計最終年度の財務目標として掲げる「2011年3月期売上高2,000億円以上、経常利益100億円以上」の達成に向けて不可欠な成長戦略が十分とは言えない結果であったと認識しています。

一方で、厳しい経営環境にありながら、経営の安全性を維持しつつ、積極的な株主還元を実施できたことは、ひとつの成果であると考えています。

Q3. 第7次中計2年目の2010年3月期(以下、今期)の事業環境の見通しと取り組みについてお聞かせください。

“ 長期と短期のトレンドを見据え、酒類・調味料事業では、品質訴求ブランドの強化・育成とともに、量販系スタンダード商品の販売強化を行います。バイオ事業では、遺伝子治療、細胞医療の早期商業化を目指し、臨床開発をさらに加速させていきます ”

不況という足元の状況だけを見るのではなく、長期と短期のトレンドを見据えつつ、逆境をビジネスチャンスに転じる発想と戦略が必要であると考えています。

酒類・調味料事業を取り巻く環境は、長期的に見ると、人口減少・少子高齢化による消費量の減少や企業間競争のさらなる激化が予想され、このような環境に対応するためには、お客様のこだわりを刺激する品質訴求ブランドをじっくりと、時間をかけて強化・育成していくことが必要です。一方で、短期的に見ると、金融危機以降の景気低迷に伴うお客様の生活防衛意識の高まりから、単価の安い商品の需要が拡大しています。こうした低単価需要に対しては、利益マネジメントを徹底しながら、量販系スタンダード商品の販売を強化して「量の確保」を行うことが必要となります。こうした認識のもと、今期の国内酒類事業では、品質訴求ブランドとスタンダード商品双方の収益力をさらに向上させる施策を行い、長期・短期それぞれの市場で勝てる強いブランドを育成してまいります。

加えて、海外における事業拡大に向けた基盤強化に取り組みます。現在は米国経済が低迷していますが、近い将来には必ず回復すると考えています。また、健康志向の高まりから、日本食に対する認知が拡大し、日本酒への関心も高まっているというトレンドがあります。米国経済が低迷する現在こそ、長期トレンドを見据えて準備を行うチャンスであると考えています。具体的な施策としては、米国宝酒造(カリフォルニア)で清酒を現地生産している利点を活かし、西海岸の米国系食品スーパーにおける取扱量拡大を目指すとともに、ニューヨーク支店を拠点に東海岸の米国系リカーストアに向けた直接営業を加速するなど、新たな販売チャネル開拓による清酒の拡販を目指します。また、米国拠点からカナダ、欧州市場に向けた輸出も強化します。

国内の伸びる市場として位置付けている加工業務用調味料については、機能性と、少量使用でも高い調味効果が得られる経済性を備えた商品ラインナップを拡充し、酒類調味料と食品調味料の両輪で新規大口顧客の開拓と既存顧客の取扱品目増を目指します。

以上の施策により、今期の宝酒造グループは、当期比0.5%増となる1,702億円の売上を計画しています。今期は低価格商品への需要が高まるため、販売促進費を増加させる計画ですが、14億円超のコストダウン施策を行うことで、当期並みの営業利益を目指します。

バイオ事業では、遺伝子工学研究分野において、新製品開発の加速と価格競争力の強化などによって技術基盤と収益基盤を一層強化し、医食品バイオ分野においては、健康志向食品の売上拡大と、ハタケシメジ・ホンシメジの生産技術力向上などによって収益力の強化を目指します。また、これらの両分野によって事業基盤を固めながら、長期的な成長分野として位置付ける遺伝子医療分野においては、遺伝子治療、細胞医療の早期商業化を目指し、臨床開発をさらに加速してまいります。

以上の施策を踏まえ、今期のタカラバイオグループは、売上高については、円高の影響で海外売上高が目減りすることから当期を若干下回るものと予想していますが、コストダウンや、その他経費の削減により営業増益を見込んでいます。

健康食品事業を行う宝ヘルスケア社においては、「TaKaRa フコイダンサプリ50」に広告宣伝費を集中投下して顧客の獲得を目指すとともに、タカラバイオの研究成果を訴求する広告展開によって「明日葉」関連商品のブランド育成を行うなど、事業の成長スピード加速に向けた施策を行ってまいります。



今期の当社グループ連結業績目標は、売上高が1,932億円(当期比0.2%増)、営業利益は89億円(当期比0.6%増)の4期連続営業増益を目指します。経常利益は90億円(当期比3.4%増)、純利益につきましては、当期は税効果会計のプラス要因があったため、当期比11.3%減の50億円となる見込みです。

Q4. 長期経営構想「TaKaRa Evolution-100(以下、TE-100)」の終了年である、2010年が迫ってきていますが、当初掲げた目標に対する達成度合いについてお聞かせください。

“持株会社体制へ移行し、酒類・調味料事業では、基盤事業としての安定性を強固にできました。バイオ事業では、飛躍のための布石を打つことはできましたが、今後さらなる成長が必要です”



2000年にスタートしたTE-100では、「酒類・調味料事業で安定した収益基盤をつくり、バイオ事業で飛躍的な成長を遂げる」という長期構想を持ち、2002年には、酒類・調味料事業とバイオ事業を分社化することで、この構想を加速させる体制を整えました。

各事業を振り返りますと、酒類・調味料事業を行う宝酒造グループでは、息の長いブランド育成や販路の開拓を継続してきた結果、複数の強いブランドを持ち、様々な販路に対して柔軟な売り方ができ、不況下においても着実に利益をあげることができた企業体質となりました。その結果、3期連続の営業増益を達成し、グループの基盤事業としての安定性を強固にできたものと評価しています。

一方、バイオ事業を行うタカラバイオグループでは、2004年12月にタカラバイオの上場を果たしたほか、米国の研究用試薬メーカーであるクロンテック社の買収によって事業基盤に厚みを持たせ、当期には2期連続の営業黒字を達成しました。これによって「バイオ事業で飛躍的な成長を遂げる」という長期構想の実現に向けて布石を打つことができたと考えています。

次のステージは、遺伝子治療・細胞医療の商業化です。長期構想を現実のものにするべく、引き続き、さらなる臨床開発を進めていきます。

Q5. 最後に、株主還元の考えについて、お聞かせください。

“当期の配当は、前期と同額の1株当たり8円50銭とさせて頂きました。さらに、自己株式の取得も実施することで、第7次中計で掲げた株主還元の実行に努めました”

当社グループでは、中長期的な視野のもと、グループ全体の事業基盤の強化と利益成長の実現による、企業価値と株主利益の最大化を目指して利益配分を行っています。具体的な還元方針としては、配当と自己株式の取得による株主還元性向の下限值(50%)を設定し、利益を還元しています。

当期の配当は、前期同様1株8円50銭とさせて頂きましたので、「株主還元総額」は、配当総額18億10百万円と自己株式の取得21億67百万円を合算し、39億77百万円となり、株主還元性向は79%となりました。この実績は、第7次中計で掲げた3カ年累計還元総額100億円以上に向けて順調なスタートであり、株主還元性向50%以上という還元方針を大きく上回るものでありました。

今期も配当と自己株式の取得によって、株主の皆様には積極的な還元を実施する予定です。

今後とも、第7次中計の目標必達に向け、全社を挙げてグループの企業価値向上に努めてまいります。株主の皆様の一層のご支持を賜りたく、お願い申し上げます。

2009年7月
代表取締役社長

大宮久

「酒類・調味料事業で安定した収益基盤をつくり、
バイオ事業と健康食品事業で飛躍的な成長を遂げる」という方針のもと、
成長軌道へ向けた戦略を遂行しています。

持株会社・宝ホールディングスの傘下には、酒類事業や調味料事業を展開する宝酒造グループ、
バイオ事業を展開するタカラバイオグループ、健康食品事業の成長を担う宝ヘルスケアがあります。



グループ会社のトピックス (2009年3月期)

■ 宝酒造グループ
本格麦焼酎「**知心剣**」を
業務用ルート限定で発売



2008年8月、麦本来の香りと味わいが特徴の、本格麦焼酎「知心剣」を発売

■ 宝ヘルスケア株式会社
TaKaRa
フコイダン〈カプセル〉を発売



2009年2月、ガゴメ昆布「フコイダン」を1粒あたり100mg配合したカプセルを発売

■ タカラバイオグループ
国立がんセンター中央病院にて、
再発白血病を対象とした遺伝子
治療の治験を開始



2008年10月、国内で初めて再発白血病を対象としたHSV-TK遺伝子治療の治験を、国立がんセンターと共同で開始

宝酒造グループ

TaKaRaグループのコア事業である酒類・調味料事業の歴史は、1842(天保13)年までさかのぼります。以来160有余年にわたり、時代や消費者が求める価値観や嗜好に対して、常に独創的で確かな技術に裏づけられた安心できる商品を提供することを使命に活動を続けています。その商品カテゴリーは、焼酎、清酒、ソフトアルコール飲料、ワイン、ウイスキー、中国酒、調味料、原料用アルコールなど幅広く展開しており、また日本国内のみならず、米国、中国、英国スコットランドなどの子会社を通じて、グローバルな事業展開を行っています。



昭和初期の木製看板

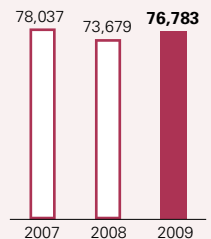
■ 焼酎

長年培ってきた独自の蒸留技術や貯蔵技術によって、時代が求める焼酎を追求し、市場を創造し続けることで、焼酎市場の発展に貢献してきました。甲類焼酎では、発売から30年以上のロングセラーを続ける“宝焼酎「純」”をはじめ、伝統と安心の焼酎No.1ブランド“宝焼酎”など、品質に支えられたブランドによりトップシェアを堅持しています。また、芋100%にこだわった“全量芋焼酎「一刻者」”、麦本来の味わいを追求した“本格麦焼酎「知心剣」”など、様々な原料において独自の技術に

よる品質にこだわった焼酎を発売・育成し、本格焼酎市場においても確固たる地位を築いています。



売上高 (百万円)



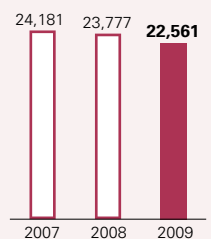
■ 清酒

“松竹梅”は、「よろこびの清酒」として高品質なイメージにより成長を遂げ、慶祝・贈答市場におけるトップブランドとして磐石な地位を確立しています。ソフトパック市場においても、二段酵母仕込によるコクとキレを追求した“松竹梅「天」”が多くのお客様からご支持をいただいています。また、“松竹梅「白壁蔵」〈生酏純米〉”など特定名称酒については、伝統的な手造りの原理を再現した最新鋭の設備と、人の手で行う酒造りの両方を併せもつ兵庫県の灘にある白壁蔵を中心に製造しています。「本当に旨くてよい酒とは何か」を徹底的に

追求し、これからも造りや原材料にこだわり、お客様に満足していただける高品質で個性的な商品を提案していきます。



売上高 (百万円)



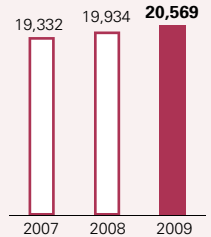
■ ソフトアルコール飲料

1984年に日本初の缶入りチューハイとして衝撃的なデビューを飾った“タカラcanチューハイ”は、時代を捉えた商品として、その後の缶チューハイ市場をリードするとともに、厳選された「焼酎」「果汁」「水」と確かな技術に裏づけられたこだわりの品質は、今も多くのお客様からの高いご支持をいただいています。また、「ストレート混濁果汁」を使用し、果汁のおいしさに徹底的にこだわった“タカラCANチューハイ「直搾り」”や、下町の大家

酒場で愛される辛口チューハイの味わいを追求した“TaKaRa「焼酎ハイボール」”、糖類不使用で果汁50%の“おいしいチューハイ”など、お客様の様々な嗜好にお応えできるこだわりの商品を開発、育成していきます。



売上高
(百万円)



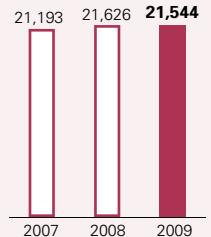
■ 調味料

「お酒のチカラでもっとおいしく」をテーマに、本みりんのトップブランドとして日本の食文化とともに進化・発展を続けてきた“タカラ本みりん”や、素材の生臭みを消し、料理に深いコクとうまみを与える“料理のための清酒”など、料理をおいしく、食卓を豊かにする様々な酒類調味料をご提案しています。また、伸張する中食市場に向けては、お惣菜や加工食品などに適した酒類調味料やだし調味料など、加工業務用専用の「京寶」ブランドをはじめとする商品を取り揃えるとともに、食品分析や

アルコールの調理効果研究、レシピ開発などお客様とともに様々な課題解決に取り組んでいます。これからもお客様のニーズにお応えしながら、食の新たな価値創造を支援していきます。



売上高
(百万円)



海外

日本食のグローバル化に伴い、現在、欧米やアジアを中心に世界40カ国以上の国々で、清酒「松竹梅」をはじめとする“TaKaRa”製品が親しまれています。米国全土および欧州向けの清酒やみりんなどを製造・販売する米国宝酒造(株)、バーボンウイスキー“ブランドン”を扱うエイジ・インターナショナル社(米国)、スコッチウイスキーの製造・販売を行うトマーチン社(英国スコットランド)、中国で清酒やみりん、焼酎の製造・販売を行う宝酒造食品有限公司の4社を軸に、各拠点のネットワークを相互に活用しながら、より効果的な活動を目指すとともに、国際的な事業展開を積極的に進めていきます。



米国宝酒造(株)

タカラバイオグループ

TaKaRaグループのバイオ事業の使命は、バイオテクノロジーを利用した遺伝子治療などの革新的なバイオ技術の開発を通じて、人々の健康に貢献することにあります。バイオテクノロジーの研究によって生み出される遺伝子医療は、人々の健康と生命を守るためにあります。その実現のため、タカラバイオグループでは、技術および収益の基盤である「遺伝子工学研究分野」を成長させる一方、「医食品バイオ分野」を第2の安定収益事業に育成し、「遺伝子医療分野」に経営資源を投入することで、遺伝子治療・細胞医療の商業化を目指しています。



■ 遺伝子工学研究分野

世界のバイオ研究者を対象に、研究用試薬および理化学機器の製造販売や研究受託サービスなどを提供しています。

研究用試薬・理化学機器においては、遺伝子増幅法として幅広く利用されているPCR法に関するライセンスを受け、高い正確性、優れた伸長性および確実性を併せもつPCR酵素や、伸長性に優れた逆転写酵素など、市場のニーズにマッチした製品の開発を進め、全世界に提供しています。2005年9月には米国クロンテック社を買収し、研究用試薬のラインナップが大幅に拡充されました。また、クロンテック社製品の製造を米国から中国に移管することにより、利益面でも相乗効果が現れてきています。

研究用試薬の豊富な製品群を、宝生物工程(大連)有限公司で製造し、日本だけではなく、世界各地の子会社を通じて全世界に販売することで、

グローバルマーケットにおいて確固たる地位を築いていきたいと考えています。

研究受託サービス事業では、ゲノム解析センターであるドラゴンジェノミクスセンターを中心に、ゲノムの配列解析にとどまらず、次世代シーケンス技術を利用した高速シーケンス解析、DNAチップを用いた遺伝子発現解析なども行っており、総合的な研究受託サービスを整えています。今後も、バイオ研究を取り巻く急激な技術革新に迅速に対応し、新サービスの提供を行っていきます。

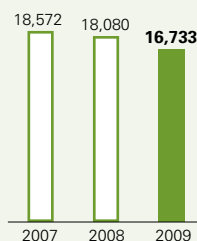


研究用試薬



リアルタイムPCR装置

売上高 (百万円)



■ 医食品バイオ分野

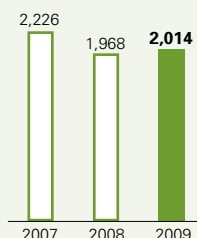
日本古来の食材をバイオテクノロジーの目で見つめなおし、その機能を解析し、健康志向食品として消費者の皆様にお届けしています。また、長年培ってきたキノコの大量生産技術を活用した事業も展開しています。

健康食品事業では、昆布「フコイダン」、寒天「オリゴ糖」、明日葉「カルコン」、キノコ「テルペン」、ボタンボウフウ、トゲドコロなどの生理活性に関

する研究を進め、これらの機能性素材を活用した健康志向食品の開発・製造を行っており、その販売は宝ヘルスケア社が担っています。

キノコ事業においては、スーパーの食品売り場などで、当たり前のように並んでいるブナシメジの大量生産技術の開発に世界で初めて成功し、現在ではJA全農長野や雪国まいたけ社などへのブナシメジ菌株や大量生産技術などのライセンス

売上高 (百万円)



事業を推進するとともに、ハタケシメジやホンシメジなどの生産販売にも取り組んでいます。さらに、マツタケゲノムなどを活用した高付加価値キノコの新規生産技術の開発を進めています。



ホンシメジ

■ 遺伝子医療分野

遺伝子工学研究分野で培われたテクノロジーを利用して、遺伝子医療（遺伝子治療、細胞医療）に必須な中核技術を開発し、その商業化を目指しています。

遺伝子医療分野におけるタカラバイオの中核技術の一つは、米国インディアナ大学と共同開発したレトロネクチン法であり、タカラバイオは全世界における独占の実施権を保有しています。レトロネクチン法は、体外遺伝子治療の際に使われるもので、これまで難しいとされてきた造血幹細胞などの血球系細胞への高効率遺伝子導入を可能とするものです。レトロネクチン法は、様々な公的医療機関での遺伝子治療臨床研究で採用されており、民間

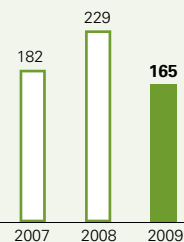
企業が行っている臨床試験にも利用されています。今後も積極的に全世界にライセンスアウトしていくことで、技術の普及と収益の拡大を目指します。

さらに、タカラバイオは自社プロジェクトとして、国立がんセンターと治験契約を締結し、同センター中央病院にて、再発白血病を対象とした体外遺伝子治療の治験を国内で初めて開始しています。また細胞医療においては、タカラバイオの二つ目の中核技術であるレトロネクチン拡大培養法を用いたがん細胞免疫療法の臨床開発や、がん細胞免疫療法に関する支援事業を展開しています。



レトロネクチン®

売上高
(百万円)



宝ヘルスケア

宝ヘルスケアは、TaKaRaグループの持つ独自素材や技術を活かした安心・安全な健康食品を、お客様へ直接お届けするダイレクトマーケティングを通じて、人々の健康で生き生きとした生活を応援しています。その具体的な役割は、タカラバイオが素材の研究・開発を行い、研究データを蓄積した上で、宝ヘルスケアと共同で製品開発を行います。そして宝ヘルスケアは、タカラバイオから製品の供給を受けて、マーケティング活動や通信販売を中心とする販売活動を行います。この一連の取り組みの中でお互いのシナジーを追求し、健康食品事業の成長を加速させていきます。



TaKaRa健康通販トップページ



TaKaRa フコイダンサブリ50



明日薬カルコン



クーガイモ

コーポレート・ガバナンス

当社グループは、「自然との調和を大切に、発酵やバイオの技術を通じて人間の健康的な暮らしと生き生きとした社会づくりに貢献します」という企業理念のもと、企業としての社会的責任を果たし、当社を取り巻く様々なステークホルダーから信頼されることによって、持続的な企業価値向上が可能となると考えております。このような認識のもと、当社グループでは、コーポレート・ガバナンスの充実を重要な経営課題と捉え、その充実に努めています。

■ コーポレート・ガバナンスの基本的な考え方

当社グループ全体の企業価値向上のために、

- ① グループ各社に権限を委譲し、自立経営のもと事業の展開スピードをあげ、各社において企業価値向上を追求する。
- ② 会議体の定期的な運営等を通じ、各社の事業報告や今後の経営方針・事業戦略について意見交換しあえる風土を維持することで、グループ全体の企業価値向上を追求する。
- ③ 法令遵守の姿勢や倫理性を確保し、コンプライアンス体制を維持することで、グループ全体での企業の社会的責任を果たす。
- ④ オープンかつタイムリー、そして正確な情報開示を継続し、適時開示に対する社内体制を維持することで、経営の透明性を高める。

■ 監査役監査、内部監査および会計監査について

2009年6月26日現在、当社の取締役会は9名で構成されており（うち社外取締役は1名）、監査役制度を採用しております。監査役は5名、うち3名は社外監査役です。監査役は、取締役会等の重要会議への出席や業務・財産および重要書類の調査を通じて、取締役の職務執行を監査しております。また、監査役は会計監査人と監査計画・監査方針・監査実施状況に関して定期的に意見交換を行うほか、会計監査人の監査体制について説明を受け、会計監査人が行う実地棚卸等に立会する等を通じて会計監査業務に関するモニタリングを行っております。内部監査部門である監査室は、内部監査を実施して必要な対策を講じることにより、職務執行の適正確保に努めております。また監査室は、監査役と監査計画・監査重点項目等について意見交換を行うほか、実施した内部監査の報告を社長に行うとともに監査役にも随時行っております。

■ コーポレート・ガバナンスに重要な影響を与えうる特別な事情

当社の上場子会社タカラバイオ株式会社について

2009年3月31日現在、当社は、タカラバイオ株式会社（東証マザーズ、コード番号4974）の議決権の70.9%を所有する親会社であります。当社と同社の関係は以下の通りであります。

① 当社グループにおけるタカラバイオ株式会社の位置付け

タカラバイオ株式会社は、2002年4月1日に、物的分割の方法により当社の100%子会社として設立いたしました。その後、当社の議決権所有比率は、同社による第三者割当増資、公募増資、新株予約権付社債の発行等により、現在の議決権所有比率となっております。

当社グループは、純粋持株会社である当社、子会社34社および関連会社6社で構成され、その中でタカラバイオ株式会社はバイオテクノロジー専門の事業子会社として位置付け、当社グループとしてバイオ事業を推進しております。

② 当社のグループ会社管理について

当社は、連結経営管理の観点から「グループ会社管理規程」を定め運用しておりますが、その目的はグループ各社の独自性・自立性を維持しつつ、グループ全体の企業価値の最大化を図ることにあります。タカラバイオ株式会社についても同規程を適用しており、同社の取締役会において決議された事項等の報告を受けておりますが、取締役会決議事項の事前承認等は求めておらず、同社が独自に事業運営を行っております。

また当社は、「グループ戦略会議」、「バイオ連絡会議」等の会議体を設けており、タカラバイオ株式会社の代表取締役、役員、執行役員等の出席を求めています。これらの会議体は、グループ全体の方針についての討議や、グループ会社間の報告を目的としたものであり、同社の自主性・独立性を妨げるものではありません。

当社株券等の大規模な買付行為に対する対応方針（買収防衛策）について

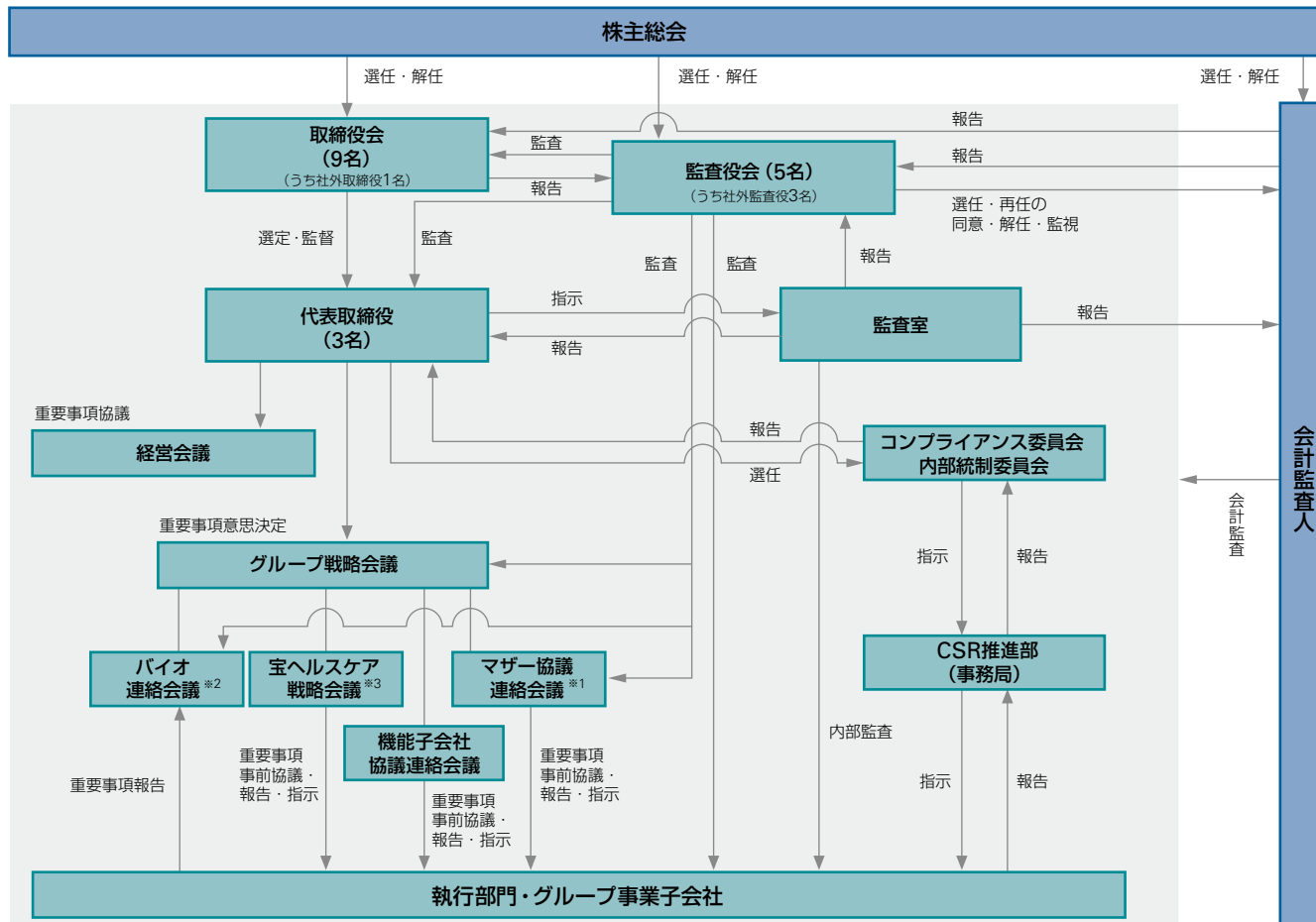
当社は、2006年5月15日の当社取締役会決議により、企業価値、ひいては、株主の皆様様の共同の利益を確保し、又は向上させることを目的に、「当社株券等の大規模な買付行為に対する対応方針（買収防衛策）」を導入しました。

しかし、株主の皆様様の意思をより多く反映させることが株主の皆様様の共同の利益の最大化に資するとの考えから、2007年5月15日開催の当社取締役会において、買収防衛策の導入を当社の株主総会にお諮りして株主の皆様様の決議に付すこと、および、対抗措置発動の判断は、原則として当社の株主総会での決議をもって執行すること、といった内容を有する買収防衛策に変更することを決議いたしました。その内容につきましては、当社ホームページ（<http://www.takara.co.jp/>）並びに有価証券報告書、当アニュアルレポートのMDA（英文版のみ）において概要を掲載しておりますのでご参照願います。

なお、2007年6月28日開催の当社第96回定時株主総会において、当買収防衛策の導入が承認決議されております。

コーポレート・ガバナンス体制 模式図

(2009年6月26日現在)



※1 マザー（酒類・調味料事業）協議連絡会議 ※2 バイオ（バイオ事業）連絡会議 ※3 宝ヘルスケア（健康食品事業）戦略会議

コーポレート・ガバナンス

役員

2009年6月26日現在



宝ホールディングス株式会社 代表取締役社長
兼 宝酒造株式会社 代表取締役社長
兼 タカラバイオ株式会社 取締役会長

大宮 久



宝ホールディングス株式会社 代表取締役副社長
(経営企画・財務・経理・IR・CSR・環境広報統括)
兼 宝酒造株式会社 代表取締役副社長

大宮 正



宝ホールディングス株式会社 代表取締役副社長
(総務人事・業務革新推進統括)
兼 宝酒造株式会社 代表取締役副社長

後藤 功



タカラバイオ株式会社 代表取締役社長
兼 宝ホールディングス株式会社 取締役

仲尾 功一

宝ホールディングス株式会社

取締役	矢野 雅晴 (経営企画担当・CSR担当 兼 宝酒造株式会社 取締役)
取締役	松崎 修一郎 (経理担当・財務担当・IR担当・財務部長・IR室長 兼 宝酒造株式会社 常務取締役)
取締役	岡根 孝男 (総務人事担当・環境広報担当・業務革新推進担当・総務人事部長 兼 宝酒造株式会社 取締役)
取締役	中尾 大輔 (兼 宝酒造株式会社 専務取締役)
取締役(社外取締役)	植田 武彦 (兼 宝酒造株式会社 取締役)
常勤監査役	釜田 富雄
常勤監査役(社外監査役)	半田 邦博
監査役	友村 秀夫
監査役(社外監査役)	太田 芳枝
監査役(社外監査役)	香川 孝三

みなさまに「いきいき」をお届けする企業であり続けるために 社会や地球にやさしい「緑字企業」へ

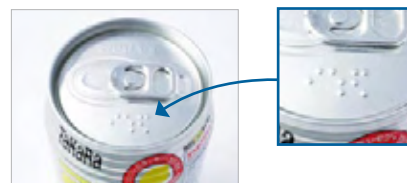
TaKaRaグループは、水や農作物などの自然の恵みを受けて事業活動を行っています。豊かな自然環境なくしては事業が成り立たないことから、古くから自然環境に配慮する企業精神が受け継がれ、自然保護活動や環境負荷削減活動に積極的に取り組んでいます。

■ お客様の「いきいき」のために

宝酒造では、ISO9001品質マネジメントシステムの認証を全工場取得しており、品質・安全性・適法性の保証が得られる原材料のみを使用するなど、安心できる商品をお客様にお届けできるように、商品企画から設計、調達、製造、出荷にいたる全工程で品質と安全性を追求しています。

1995年からは誤認飲酒防止のため、国内で初めてタカラcanチューハイシリーズの缶ぶたに点字で「おさけ」の表示を入れ、2002年には、やはり国内で初めて酒類紙パック商品のキャップに、同様の表示を入れました。

また、適正飲酒の推進は酒類を製造販売する企業の重要な責任と考え、この問題にいち早く取り組んできました。1985年の「Say Noキャンペーン」では「いい日、いい酒、いいマナー」を提唱し、様々な形でメッセージを発信しました。1995年からは、未成年者飲酒防止、飲酒運転防止のための注意表記を酒類商品に表示しています。



缶ぶたに点字を表示



キャップに点字を表示

■ 社会の「いきいき」のために

宝ホールディングスは、公益信託「TaKaRaハーモニストファンド」を1985年に設立し、以降毎年、日本の森林や水辺の自然環境を守る活動や、そこに生息する生物を保護するための研究などを行う市民の方々に資金面から援助しています。

2004年4月からは、宝酒造において「TaKaRaお米とお酒の学校」（2008年より「TaKaRa田んぼの学校」にリニューアル）を開催し、お米づくりや田んぼ周辺の自然観察を通して、自然の恵みと命のつながりを学ぶ機会を設けています。また、国内でのボランティア活動やNPO法人との協働での取り組みに積極的に参加する一方、米国サンフランシスコに拠点を構える米国宝酒造（Takara Sake USA Inc.）においても、現地の自然環境団体の活動に幅広く参加、貢献しています。



TaKaRa田んぼの学校



「箱根ガーデン」チャリティーイベントでの「松竹梅」の鑑開き



TaKaRaハーモニストファンド

■ 地球の「いきいき」のために

宝酒造では、事業活動は根本的に地球環境に負荷を与える行為であるということを実感し受け止め、地球環境への負荷軽減や自然保護活動などの社会貢献活動を、企業としての責務と考えています。そして、これらの活動成果を「緑字決算」という形で、1998年以来、社会に公表し続けています。「緑字決算」は、様々な環境負荷や環境配慮、社会活動の中から重要な項目を選定し、その改善度を総合的な収支決算として「ECO（エコ）」という指標で分かりやすく表しています。

さらに、中身のみを販売する「はかり売り」の実施や、容器を再利用できるリターナブルびんの採用、分別作業が容易なエコペットの開発など、お客様と協力して容器の4R（リフューズ：発生回避、リデュース：減量化、リユース：再使用、リサイクル：再資源化）の推進にも取り組んでいます。



緑字企業報告書（2008）



はずせるキャップ



焼酎のはかり売り

※ 詳細は宝酒造のホームページでご覧いただけます。 <http://www.takarashuzo.co.jp/environment/>

6年間の主要連結財務データ

3月31日終了事業年度

期間項目	単位:百万円						単位:千米ドル
	2009	2008	2007	2006	2005	2004	2009
外部顧客に対する売上高	¥192,790	¥191,878	¥198,535	¥196,119	¥195,359	¥196,897	\$1,967,244
酒類・調味料セグメント	159,386	156,780	167,665	—	—	—	1,626,387
バイオセグメント	18,402	19,793	20,574	—	—	—	187,775
物流セグメント	8,779	8,762	5,977	—	—	—	89,581
その他のセグメント	6,222	6,540	4,318	—	—	—	63,489
(旧)酒類・食品セグメント	—	—	173,642	176,107	178,068	179,675	—
(旧)バイオセグメント	—	—	20,574	16,490	13,671	13,560	—
(旧)その他のセグメント	—	—	4,318	3,520	3,618	3,661	—
売上原価	118,849	117,864	122,325	120,132	119,114	119,023	1,212,744
売上総利益	73,941	74,014	76,210	75,986	76,244	77,874	754,500
販売費及び一般管理費	65,090	65,507	68,550	70,062	68,841	68,514	664,183
営業利益	8,851	8,506	7,660	5,924	7,402	9,360	90,316
税金等調整前当期純利益	8,193	8,321	7,660	7,876	6,813	10,453	83,602
当期純利益	5,639	4,658	4,208	5,320	2,614	5,668	57,540
有形固定資産の減価償却費 及びその他の償却費	5,992	6,384	6,692	6,755	6,393	6,427	61,142
資本的支出	3,616	3,852	3,617	5,633	6,511	5,243	36,897
研究開発費	3,343	3,643	3,593	3,574	3,353	3,127	34,112
期末項目							
総資産	¥190,792	¥207,843	¥213,393	¥212,466	¥190,773	¥189,416	\$1,946,857
有利子負債	39,092	43,717	39,083	39,330	40,347	41,560	398,897
純資産	105,316	113,273	115,570	—	—	—	1,074,653
自己資本	93,093	99,969	102,507	101,839	89,478	88,006	949,928
1株当たり(単位:円):							(単位:米ドル)
当期純利益	¥26.32	¥21.53	¥19.44	¥24.39	¥11.74	¥25.93	\$0.26
配当金	8.50	8.50	7.50	9.00	7.50	7.50	0.08
指標(単位:%):							
総資産当期純利益率	2.8%	2.2%	2.0%	2.6%	1.4%	3.1%	
自己資本当期純利益率	5.8	4.6	4.1	5.6	2.9	6.8	
自己資本比率	48.8	48.1	48.0	47.9	46.9	46.5	

(注) 1. 百万円未満は切り捨てにより算出しております。

2. 米ドルは2009年3月31日現在のレート of 近似値98円/ドルで便宜換算しております。

3. 事業区分の変更

2008年3月期より、従来「酒類・食品」セグメントに含めておりました「物流事業」をその金銭的重要性が増したため、独立セグメントといたしました。これは、2007年3月期に新たな連結範囲に加えた長崎運送株式会社が通年寄与することとなったためです。また、飲料事業撤退に伴い、「酒類・食品」セグメントは「酒類・調味料」セグメントと名称変更いたしました。

4. 2007年3月期より「貸借対照表の純資産の部の表示に関する会計基準」および「貸借対照表の表示に関する会計基準の適用指針」を適用しております。

それにより、2007年3月期より、従来の資本の部合計に少数株主持分を加えた額を純資産として記載しております。

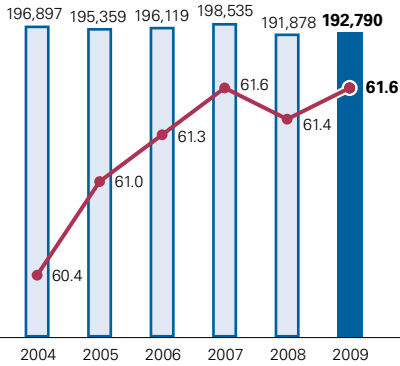
5. 2007年3月期より自己資本は、純資産－少数株主持分－新株予約権で計算しております。2006年3月期以前は、従来の資本の部合計を記載しております。

ファクトシート

売上高・売上高原価率

(百万円/%)

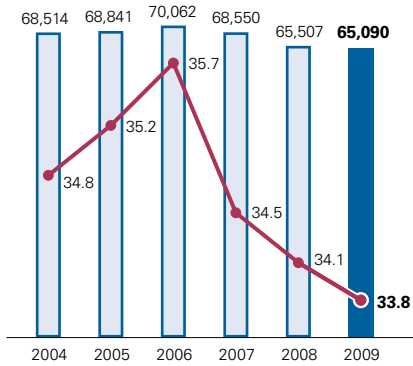
■ 売上高
● 売上高原価率



販売費及び一般管理費・売上高販管費率

(百万円/%)

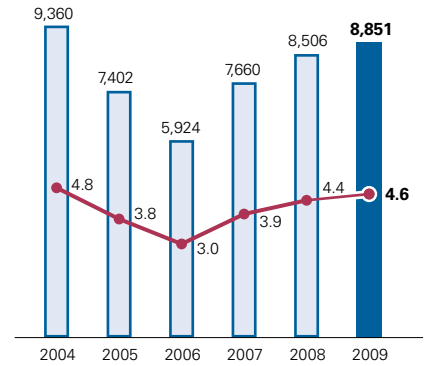
■ 販売費及び一般管理費
● 売上高販管費率



営業利益・売上高営業利益率

(百万円/%)

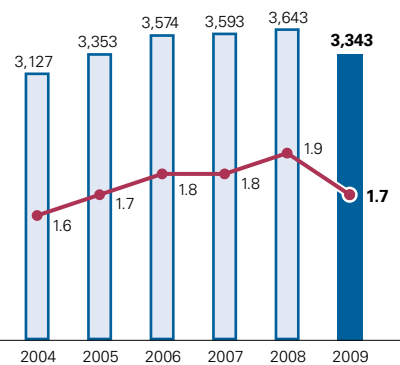
■ 営業利益
● 売上高営業利益率



研究開発費・売上高研究開発費率

(百万円/%)

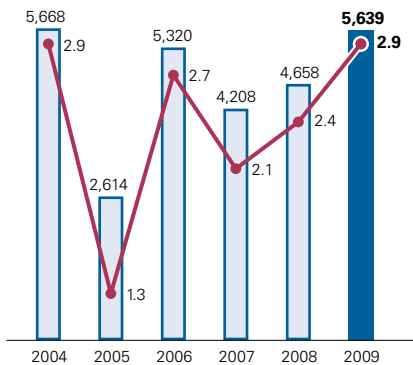
■ 研究開発費
● 売上高研究開発費率



当期純利益・売上高当期純利益率

(百万円/%)

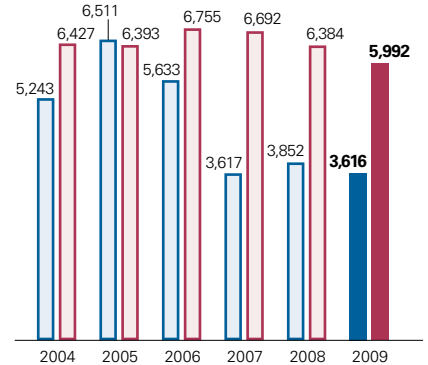
■ 当期純利益
● 売上高当期純利益率



資本的支出・減価償却費及びその他の償却費

(百万円)

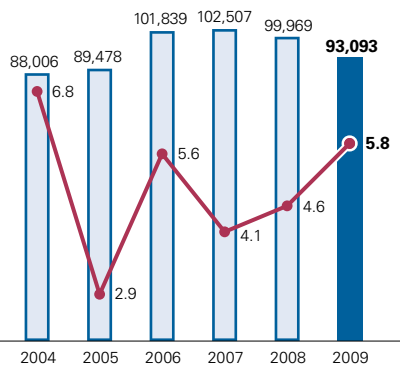
■ 資本的支出
■ 減価償却費及びその他の償却費



自己資本・自己資本当期純利益率

(百万円/%)

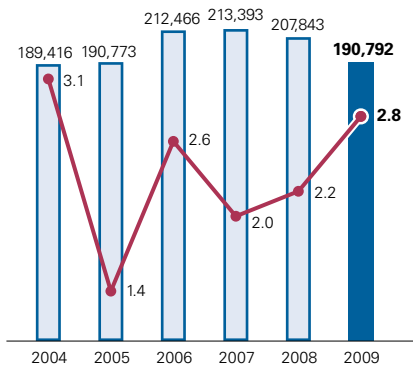
■ 自己資本
● 自己資本当期純利益率



総資産・総資産当期純利益率

(百万円/%)

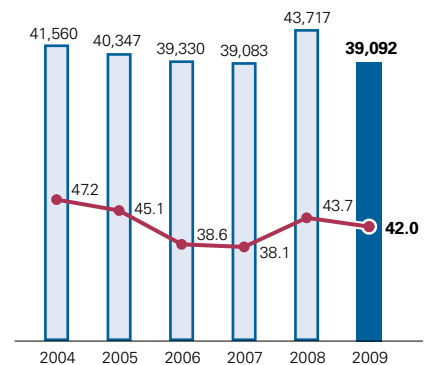
■ 総資産
● 総資産当期純利益率



有利子負債・D/Eレシオ

(百万円/%)

■ 有利子負債
● D/Eレシオ



D/Eレシオ = 有利子負債 ÷ 自己資本 × 100

主要子会社データ

2009年3月31日現在

会社名	所在地	資本金	議決権の 所有割合	主な事業内容
宝酒造株式会社	〒600-8688 京都府京都市下京区四条通烏丸東入長刀鉾町20 TEL 075-241-5110【お客様相談室】TEL 075-241-5111	1,000百万円	100.0%	酒類、調味料、原料用アルコールの製造・販売
宝酒造株式会社の連結子会社				
タカラ物流システム株式会社	〒610-0343 京都府京田辺市大住浜55-13 TEL 0774-68-1720	50百万円	(100.0%)	運送業、倉庫業、自動車整備業、 損害保険代理業、旅行業等
ティービー株式会社	〒610-0343 京都府京田辺市大住浜55-13 TEL 0774-65-3840	10百万円	(100.0%)	運送業、倉庫業
長崎運送株式会社	〒850-8668 長崎県長崎市尾上町1-16 TEL 095-823-0161	250百万円	(100.0%)	運送業、通関業、倉庫業等
小牧醸造株式会社	〒895-1816 鹿児島県薩摩郡さつま町時吉12 TEL 0996-53-0001	16百万円	(50.0%)	焼酎の製造・販売
株式会社ラック・コーポレーション	〒107-0052 東京都港区赤坂5-2-39 TEL 03-3586-7501	80百万円	(100.0%)	ワイン輸入販売
タカラ物産株式会社	〒612-8338 京都府京都市伏見区舞台町9 TEL 075-601-6267	10百万円	(100.0%)	飼料販売
タカラ容器株式会社	〒612-8061 京都府京都市伏見区竹中町609 TEL 075-605-4540	30百万円	(100.0%)	容器卸売業
株式会社トータルマネジメントビジネス	〒612-8061 京都府京都市伏見区竹中町609 TEL 075-623-2660	20百万円	(100.0%)	広告代理業、マーケティングに関する調査、 販促企画、人材派遣事業、飲食店経営
USA Takara Holding Company (米国)	708 Addison St., Berkeley, CA 94710, U.S.A. TEL 510-540-8250	4,094千米ドル	(100.0%)	持株会社
Takara Sake USA Inc. (米国)	708 Addison St., Berkeley, CA 94710, U.S.A. TEL 510-540-8250	3,000千米ドル	(90.0%)	酒類製造・販売
AADC Holding Company, Inc. (米国)	229 W.Main St., Frankfort, KY 40602, U.S.A. TEL 502-223-9874	30米ドル	(100.0%)	持株会社
Age International, Inc. (米国)	229 W.Main St., Frankfort, KY 40602, U.S.A. TEL 502-223-9874	250千米ドル	(100.0%)	バーボンウイスキーの販売
The Tomatin Distillery Co., Ltd. (英国)	Tomatin, Inverness-shire, IV13 7YT Scotland, U.K. TEL 1808-511-234	3,297千ポンド	(80.6%)	スコッチウイスキーの製造・販売
J&W Hardie Ltd. (英国)	Tomatin, Inverness-shire, IV13 7YT Scotland, U.K. TEL 1808-511-234	250千ポンド	(100.0%)	スコッチウイスキーの製造・販売
宝酒造食品有限公司 (中国) (英文名: Takara Shuzo Foods Co.,Ltd.)	506 Room, Huatengbeitang Commercial Tallbuilding NO.37 Nanmofang Road, Chaoyang District Beijing, China 100022 TEL 010-5190-0975	130,000千元	(62.0%)	酒類、調味料、原料用アルコールの製造・販売、 宝酒造グループ製品の輸入販売
広州市利宝餐飲管理有限公司 (中国) (英文名: LB FOOD SYSTEM CO.,LTD.)	18/F, Yue Hai Building No.472, Huan Shi Dong Road, Guangzhou, China 510075 TEL 020-8761-1100	4,800千元	(51.0%)	広州市における日本料理レストランの 店舗運営会社
上海宝酒造貿易有限公司 (中国) (英文名: Shanghai Takara Shuzo International Trading Co.,Ltd.)	Room 19J, Li Du Xin Gui, No.831 Xin zha Road, Shanghai, China 200041 TEL 021-6218-1383	4,896千元	(100.0%)	宝酒造グループ製品の輸入販売、 中国優良産品の輸出
タカラバイオ株式会社	〒520-2193 滋賀県大津市瀬田3-4-1 TEL 077-543-7200	9,040百万円	70.9%	研究用試薬、理化学機器の製造・販売、研究受託 サービス、遺伝子治療・細胞医療の商業化
タカラバイオ株式会社の連結子会社				
瑞穂農林株式会社	〒622-0313 京都府船井郡京丹波町保井谷三ツ枝38	10百万円	(49.0%)	キノコ類の生産、販売、技術指導
有限会社タカラバイオファームセンター	〒899-7306 鹿児島県曾於郡大崎町永吉4217	3百万円	(48.3%)	農産物・林産物の生産、加工並びに販売
株式会社さきのごセンター金武	〒904-1201 沖縄県国頭郡金武町字金武9006	5百万円	(49.0%)	キノコ類の生産、販売
宝生物工程(大連)有限公司 (中国)	No.19 Dongbei 2nd Street, Development Zone, Dalian, China 116600	2,350百万円	(100.0%)	研究用試薬の製造・販売および関係技術サービス
Takara Bio Europe S.A.S. (仏国)	2, avenue du president Kennedy, 78100 St Germain en Laye, France	600千ユーロ	(100.0%)	研究用試薬の販売
Takara Korea Biomedical Inc. (韓国)	Lotte New T Castle 601, 429-1, Gasam-dong, Gumchun-gu, Seoul, 153-803, Korea	3,860百万ウォン	(100.0%)	研究用試薬、理化学機器の販売、研究受託、 遺伝子検査
宝日医生物技術(北京)有限公司(中国)	Life Science Park, 22 KeXueYuan Road Changping District, Beijing, China 102206	800百万円	(100.0%)	バイオ医薬の研究開発、研究用試薬、理化学機器 の製造・販売
Takara Bio USA Holdings Inc. (米国)	1290 Terra Bella Avenue, Mountain View, CA 94043, U.S.A.	70,857千米ドル	(100.0%)	持株会社
Clontech Laboratories, Inc. (米国)	1290 Terra Bella Avenue, Mountain View, CA 94043, U.S.A.	83千米ドル	(100.0%)	研究用試薬の開発・製造・販売、 研究受託サービス等
宝ホールディングス株式会社の連結子会社				
宝ヘルスクエア株式会社	〒612-8061 京都府京都市伏見区竹中町609 TEL 075-623-2317	90百万円	100.0%	健康食品の製品開発・販売
大平印刷株式会社	〒600-8881 京都府京都市下京区西七条掛越町55 TEL 075-313-7141	90百万円	100.0%	印刷業
宝ネットワークシステム株式会社	〒600-8688 京都府京都市下京区四条通烏丸東入長刀鉾町20 TEL 075-241-5139	30百万円	100.0%	情報システム開発・運用・管理
川東商事株式会社	〒612-8338 京都府京都市伏見区舞台町9 TEL 075-601-5211	30百万円	100.0%	酒類販売、不動産賃貸

(注) 議決権の所有割合の括弧書きは間接所有割合

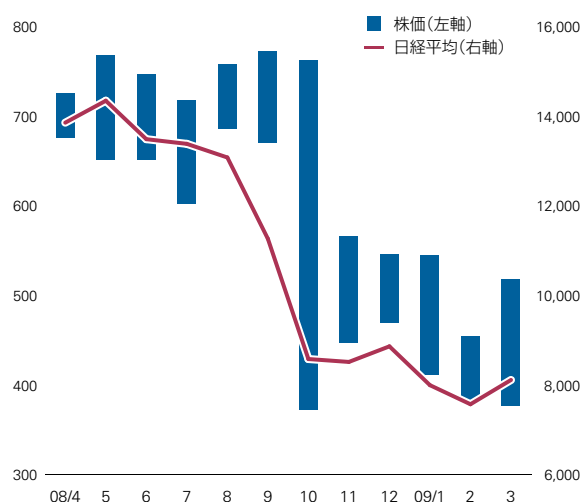
会社概要

2009年3月31日現在

■ 宝ホールディングス株式会社

商号 宝ホールディングス株式会社
事業内容 持株会社
本店所在地 京都市下京区四条通烏丸東入長刀鉾町20番地
電話 075-241-5130
設立 1925年9月6日
資本金 13,226百万円
代表者 代表取締役社長 大宮 久
ホームページアドレス <http://www.takara.co.jp>

株価の推移(円)



株主メモ

発行株式
発行可能株式総数 870,000,000株
発行済株式総数 217,699,743株
株主数 32,449名
上場取引所 東証1部、大証1部
証券コード 2531
株主名簿管理人 東京都中央区八重洲一丁目2番1号
みずほ信託銀行株式会社

同連絡先

〒168-8507
東京都杉並区和泉二丁目8番4号
みずほ信託銀行株式会社 証券代行部
電話0120-288-324 (フリーダイヤル)

株主総会

定時株主総会は、毎年6月に京都で開催されています。
その他、必要のある場合には少なくとも2週間の事前通告をもって、臨時株主総会が開かれる場合があります。

大株主(上位10名)

氏名又は名称	所有株式数 (千株)	所有株式数の 割合(%)
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	12,336	5.67
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	10,690	4.91
株式会社みずほコーポレート銀行	9,738	4.47
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4G)	9,520	4.37
農林中央金庫	9,500	4.36
明治安田生命保険相互会社	6,318	2.90
株式会社京都銀行	5,000	2.30
国分株式会社	3,489	1.60
三菱商事株式会社	3,000	1.38
JPモルガン証券株式会社	2,822	1.30

(注)所有株式数の千株未満は切り捨てております。
上記のほか、当社は自己株式を4,704,906株(所有株式数の割合は2.16%)保有しております。

■ 宝酒造株式会社

商号 宝酒造株式会社
本社所在地 京都市下京区四条通烏丸東入長刀鉾町20番地
電話 075-241-5110
設立 2002年4月1日
資本金 1,000百万円
発行済株式総数 20,000株
大株主及び
所有株式数の割合 宝ホールディングス株式会社 100%
代表者 代表取締役社長 大宮 久
ホームページアドレス <http://www.takarashuzo.co.jp>

■ タカラバイオ株式会社

商号 タカラバイオ株式会社
本店所在地 大津市瀬田三丁目4番1号
電話 077-543-7212
設立 2002年4月1日
資本金 9,040百万円
発行済株式総数 282,009株
大株主及び
所有株式数の割合 宝ホールディングス株式会社 70.9%
代表者 代表取締役社長 仲尾 功一
ホームページアドレス <http://www.takara-bio.co.jp>

■ 宝ヘルスケア株式会社

商号 宝ヘルスケア株式会社
本社所在地 京都市伏見区竹中町609番地
電話 075-623-2317
設立 2006年9月7日
資本金 90百万円

発行済株式総数 3,600株
大株主及び
所有株式数の割合 宝ホールディングス株式会社 100%
代表者 代表取締役社長 加門 哲也
ホームページアドレス <http://www.takara-healthcare.co.jp>

宝ホールディングスの歴史

2009年4月1日現在

1925年	寶酒造株式会社 創立
1949年	株式を上場
2000年	長期経営構想「TaKaRa Evolution-100 (TE-100)」スタート
2002年	持株会社体制へ 持株会社 宝ホールディングス 株式会社 設立
2004年	タカラバイオ株式会社 東証マザーズ上場
2006年	グループ内の事業を再編し「宝ヘルスケア株式会社」設立
2008年	TaKaRaグループ第7次中期経営計画 スタート

酒類・調味料事業

1842年	酒造業を開始		
1916年	自社で新式焼酎・新式みりんの製造を開始		
1933年	松竹梅酒造株式会社 設立、清酒「松竹梅」の販売を開始		
1957年	ビール事業進出（「タカラビール」発売）		
1967年	ビール事業撤退		
1970年	醗酵調味液「味しるべ」発売		
1972年	中国酒の輸入販売開始		
1977年	宝焼酎「純」発売		宝焼酎「純」
1979年	“カムバック・サーモン・キャンペーン”開始		
1983年	米国宝酒造株式会社 設立		米国宝酒造
1984年	タカラcanチューハイ 発売		
1986年	「TaKaRa パービカン」発売		
1988年	宝焼酎「純」レジェンド 発売		
1993年	「すりおろしりんご」発売 特定保健用食品として「カルシウムパーラー」認可		タカラcanチューハイ
1994年	タカラcanチューハイ「デラックス」 〈すりおろしりんご〉〈あらしぼりオレンジ〉発売		
1995年	合併会社、北京寶宝食品有限公司（現・宝酒造食品有限公司）設立		
1999年3月期	緑字決算報告書（現・緑字企業報告書）を発行		
98年9月	ワイン事業に本格参入。カリフォルニアワインを輸入・販売		
98年10月			
2000年3月期			
00年3月	〈伝承健寿〉梅肉エキス入り濃縮飲料 発売 OCIA認証「特撰タカラ有機本みりん」発売		
2001年3月期		2001年3月期 01年3月	株式会社ラック・コーポレーションの株式を取得 焼酎「ZIPANG」発売
2002年3月期		2002年3月期 01年9月	全量芋焼酎「一刻者」、黒麹かめ仕込本格芋焼酎「黒壺」、本格米焼酎洞窟かめ貯蔵「巖窟王」発売 清酒・特定名称酒の拠点として灘工場「白壁蔵」完成
2003年3月期		10月 2003年3月期 02年4月 12月	分社・持株会社化により宝酒造株式会社 設立 琉球泡盛「於茂登 炎（おもと ほむら）」発売 吉岐麦焼酎「首波（おとは）」発売 生産拠点の再編
2004年3月期		03年3月 2004年3月期 03年8月 9月 04年3月	タカラ本みりん「純米」発売 松竹梅「天」発売 「ファイバーパーラー」が特定保健用食品の表示許可を取得
2005年3月期		2005年3月期 04年8月 9月	タカラ有機本料理清酒 発売 そば焼酎「十割」～そば全量～ 発売 しそ焼酎「若紫ノ君」発売 松竹梅「生冷酒」〈黒麹四段〉辛口 発売 長期貯蔵焼酎「秘蔵の扉」発売
05年2月		05年2月 3月	
2006年3月期		2006年3月期 05年8月 9月	本格米焼酎仕込“寶”京みりん 発売 松竹梅白壁蔵〈山鹿大吟醸〉氷室蔵3年甕貯蔵、〈山鹿特別純米〉氷室蔵3年甕貯蔵 発売


バイオ事業



1970年	大津市に中央研究所完成		
1970年	フナシメジの人工栽培に成功		
1979年	国産初の遺伝子工学研究用試薬「制限酵素」を発売		フナシメジ
1988年	PCR法による遺伝子増幅装置の国内独占販売権獲得		
1993年	宝生物工程（大連）有限公司 設立（中国大連市）		
1993年	全世界にわたる広範囲のPCR関連特許ライセンスを取得		
1995年	高効率遺伝子導入法であるレトロネクテン法を開発		
1995年	TaKaRa Korea Biomedical Inc. 設立（韓国ソウル市）		
1997年3月期			
96年4月	タカラアグリ株式会社 設立（03年8月タカラバイオ(株)に吸収合併）		
1998年3月期			
97年5月	遺伝子治療研究用試薬「レトロネクテン®」を全世界で発売開始		レトロネクテン®
12月	米国インディアナ大学においてレトロネクテン法を用いた遺伝子治療の臨床研究を開始		
1999年3月期			
98年8月	DNAチップ作製装置と解析装置の販売を開始		DNAチップ
2000年3月期			
99年9月	DNAチップの販売を開始		
2001年3月期		2001年3月期 00年7月	高速ゲノム解析センター、ドラゴン・ジェノミクス株式会社 設立（02年10月タカラバイオ(株)に吸収合併） 等温遺伝子増幅法「ICAN法」を開発
2002年3月期		9月 2002年3月期 02年3月	
2003年3月期		2003年3月期 02年4月 03年2月	コールドショックベクター法を用いたタンパク質発現システムを開発 分社・持株会社化によりタカラバイオ株式会社 設立 モルメド社（イタリア）と、がん自殺遺伝子治療、がんワクチン 遺伝子治療：2種の遺伝子治療技術のアジア独占実施権について合意
2004年3月期		2004年3月期 03年5月	米国VIRxSYS社に遺伝子治療用レトロネクテン®のライセンスを供与 タカラバイオ株式会社が第三者割当増資を実施 宝日医生物技術（北京）有限公司 設立（中国北京市）
10月		10月 04年1月	
2005年3月期		2005年3月期 04年11月 12月	飲む寒天〈カロリーオフ〉発売 マツタケのゲノム解析をホールゲノムショットガン方式で完了 タカラバイオ株式会社 東証マザーズ上場
04年11月			
12月			
2005年3月期		05年3月	三重大学医学部に、難治性のがんを対象としたT細胞受容体（TCR） 遺伝子治療の臨床開発を共同で推進するために、寄附講座を設置
05年3月			
2006年3月期		2006年3月期 05年5月	国立がんセンターと白血病の遺伝子治療臨床試験を目指した共同研究契約を締結
05年5月			



健康食品事業

<p>05年 9月 黒壁蔵本格麦焼酎「熟」発売 宝チューハイ壺詰 発売 白壁蔵粕取焼酎「日の本」発売</p> <p>10月 「京寶」加工業務用本みりんNの発売など、加工業務用専用ブランド「京寶」導入</p> <p>06年 3月 TaKaRa「焼酎ハイボール」発売 焼酎「JAPAN」発売 全量芋焼酎「紅一刻」、同「黒一刻」発売</p> <p>2007年3月期</p> <p>06年 5月 和三盆梅酒、芋焼酎仕込梅酒 発売</p> <p>6月 長崎運送株式会社を子会社化</p> <p>8月 しそ焼酎「しそ小町」発売 TaKaRa「おいしいチューハイ」発売</p> <p>9月 飲料事業の既存商品の販売中止を発表</p> <p>10月 東日本クッキングラボ稼働</p> <p>07年 3月 TaKaRa CAN CHU-HI「直搾り」発売 TaKaRa「ビューティースパークリング」発売</p> <p>2008年3月期</p> <p>07年 9月 全量芋焼酎「一刻者」〈石蔵甕貯蔵〉発売 「梅恋娘酒〈メイレンニャンチュウ〉うめと紹興酒のお酒、 「杏恋娘酒〈シンレンニャンチュウ〉あんずと紹興酒のお酒 発売 宝焼酎「純」のラベルデザインをリニューアル 松竹梅「純米贅沢搾り」発売</p> <p>08年 2月 本格麦焼酎「知心剣」発売</p> <p>2009年3月期</p> <p>08年 8月 松竹梅「白壁蔵」〈生酏純米〉発売</p>	 <p>加工業務用専用ブランド「京寶」</p>	 <p>本格麦焼酎「知心剣」 松竹梅「白壁蔵」 〈生酏純米〉</p>
--	--	---

<p>2007年3月期</p> <p>06年 9月 宝ヘルスケア株式会社 設立</p> <p>2008年3月期</p> <p>07年 8月 TaKaRa フコイダンサプリ50 発売</p> <p>9月 クーガイモ 発売</p> <p>08年 1月 株式会社アムスライフサイエンスと資本業務提携</p> <p>2009年3月期</p> <p>08年 6月 明日葉カルコン 発売</p> <p>09年 2月 TaKaRa フコイダン〈カプセル〉発売</p> <p>3月 飲む寒天〈糖類ゼロ〉発売</p>	 <p>TaKaRa フコイダンサプリ50</p>
---	--

<p>05年 9月 米国BD社からクローンテック事業を買収</p> <p>06年 3月 リアルタイムPCR装置を発売</p> <p>2007年3月期</p> <p>06年 7月 難治性白血病の検査法に関する特許の独占的实施権(日本を除く)を米国インビボ・スクライプ社に供与</p> <p>9月 キノコ事業において(株)雪国まいたけと業務提携契約を締結</p> <p>2008年3月期</p> <p>07年 8月 健康志向食品事業の販売機能を宝ヘルスケア(株)に移管</p> <p>10月 クローンテック社の蛍光タンパク質シリーズを発売</p> <p>08年 1月 白血病を対象としたHSV-TK遺伝子治療の臨床試験に関して、遺伝子治療用医薬品の指針への適合性を厚生労働省が確認</p> <p>08年 1月 急性白血病遺伝子治療の共同開発パートナーであるモルメド社(イタリア)が第Ⅲ相臨床試験をイタリアで開始</p> <p>3月 三重大学にて、食道がん、頭頸部がんなどを対象としたレトロネクチン拡大培養法による「がん免疫再建療法」の臨床研究を開始</p> <p>2009年3月期</p> <p>08年10月 再発白血病に対するHSV-TK遺伝子治療の治験を国立がんセンター中央病院で開始 医療法人社団聖会、タカラバイオの技術支援のもとにがん細胞免疫療法の治療を開始 RNA分解酵素(MazF)遺伝子を導入した細胞に、多剤耐性エイズウイルス臨床分離株に対する抵抗性を賦与できることを確認</p> <p>09年 3月 ヒトiPS細胞作製用試薬を発売</p>	 <p>クローンテック社</p>	 <p>三重大学内の細胞調製室</p>
---	---	--

※1997年3月期以降は、事業年度(4月1日～翌3月31日まで)での記載となっております。

宝ホールディングス株式会社

京都市下京区四条通烏丸東入長刀鉾町20番地

Phone: (075) 241-5130

www.takara.co.jp



この印刷物は環境に考慮し、大豆インキ・水なしオフセット印刷で制作し、FSC認証紙を使用しております。
また、NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構により色覚の個人差を問わず、多くの方に見やすく配慮されたデザイン(カラーユニバーサルデザイン)として認定されました。